
Unsilent Night

Blackfruits

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

U n s i l e n t N i g h t

【コード】

N 6 4 0 7 P

【作者名】

B l a c k f r u i t s

【あらすじ】

彼女なんていない、一人ぼっちのクリスマス

僕はいつも通りぼんやりとした気持ちで家に帰ってきた。

家に帰るといたのは、都内にいるはずの姉が待っていた。

「彼氏と別れた」とかいう姉。

一人と一人のこの二人は、二人だけでクリスマスを過ごす。

それは、僕にとってちよっぴり不思議で温かいクリスマスだった。

街がクリスマスモードで浮かれている中、一人の高校生がしょんぼりと通学路を歩いていた。

特にハプニングが起こることもなく、また特に面白いことが起こることもなく、青年は家のドアを開けた。

「ただいま」

青年　次郎がドアを開けてもそこには誰もいなかった。

迎えてくれる人までいないのか、と途方に暮れると、テーブルに一枚の紙切れがあった。そこには『クリスマスなので、父さんと旅行に行つてきます』という、幸せいっぱいのメッセージが書かれていた。

次郎は思わず紙きれを破って捨てたい衝動に駆られたが、やめておくことにした。

「ん……？」

微かな音が聞こえて、次郎は階段の奥をみやった。なにやら音楽のようなものが聞こえてくる。

次郎は眉をひそめながら、階段を上がった。音は確実に自分の部屋から聞こえてくる。

おそろおそろ部屋の戸を開けると、クリスマスソングが大音量で次郎の耳に飛び込んでくる。みたことのある女性が自分のベットに寝転んでいた。

「ね……姉さん!？」

姉はぼんやりと次郎の方をみやった。

「おかえりー。結構遅かったじゃん。なに、部活でもやってんの?」「いや、別に……ってそれよりなんで姉さんがここにいるんだよ?」
姉は明らかにここにいるはずがなかった。都内の大学に通っているはずだ。

「学校はどうしたんだよ?」

「んなもんさぼるに決まってるでしょ、クリスマスなんだよ？ 何が楽しくて授業に行くわけ？」

いや、行けよ。

次郎は心の中でつぶやいた。

「あのさあ、次郎」

姉は先ほどとはうって変わって真剣な表情をした。次郎は思わず手を止めた。

「彼氏と別れた」

次郎は反応できずに固まった。姉は次郎の反応を待つように黙っていた。

「……」

姉はそれでも黙っている。

「……それで、僕にどうしろと？」

姉は「分かってない」と首を横に振った。

「姉さんがこんなに落ち込んでるんだよ？ 弟として姉さんにクリスマスプレゼントを買ってくるもんじゃない？」

「は？ なんだよ、その理屈は！ 大体僕は別れることも出来ないんだぞ！ 最初からそんなものはいないんだ！」

姉は肩をすくめて、次郎の肩にぽんつと手をあてた。

「姉さんが悪かった……。次郎、可哀想に。あんたがそこまででもないとは私も想定外だった。寒い日には喜んでぱしりに行ってくれる良い奴なのに……」

姉にしみじみと言われて、次郎はなんだか複雑な気分になった。

ちなみにはしりになっているのは姉の脅しがめちやくちゃ恐いだけで、喜んで行っているわけじゃない。

「……大体なあ、クリスマスでカップルがあちこちに溢れること自体間違ってるんだ！」

次郎は吹っ切れたように叫んだ。

「うんうん」

「もてない奴はクリスマスを楽しむことも許されないのか！」

「よしよし」

「なんだか、みじめじゃないか、くそ。」

次郎は姉をみやった。

「ところで、母さんはどこいったの？ 父さんが仕事でいないのは分かるけど、母さんは？」

「は？ 姉さん紙みてないのかよ。二人ともクリスマス旅行だよ」
姉は目を丸くした。

「……死ね」

「こわ！ まあ、そういうことで今日は僕らしかいないってことだよ」

「じゃあ夕飯は？」

「知らない。あ、晩飯代なら置いてあったよ」

姉は「ふうん」と窓の外をみやった。曇ってきてはいるが、明るい空だった。

「よし、次郎。外食するぞ。制服脱いでついてこい」

「は？ え、ちょっと？」

姉はまるで將軍のように次郎に指図をした。次郎は慌てて着替えを済ませて、姉の後を追った。

「姉はちゃっかり夕食代を持ってコートを着込んだ。」

「これから、クリスマスを楽しむぞ」

二人は家を後にした。

次郎が姉について行った場所は、少し狭くてひっそりとしたレストランだった。

次郎は不思議に思って辺りを見渡した。辺りにはギターやマラカス、名前の良く知らない楽器が置いてある。次郎は楽器を使わないから、あまり楽器には詳しくない。

「これとこれ、二つずつ！ あとデザートはこれ二つ！」

「はいよ」

姉は勝手に注文を済ませた。そうして、姉は急に立ち上がった。バックからギターを取り出した。次郎は目を丸くした。

小さなステージの上で姉は気ままに楽器を弾き鳴らした。客は元々次郎と姉しかいない。思いきり楽器を弾き鳴らしてもいいのかもしれないが、不安に思っただけで次郎はレストランの人をみやった。

だが、驚いたことに彼らはにこにこ姉の様子をみつめていた。

「ほら、次郎！ こっち、こっち！」

姉に手招きされて、次郎は戸惑いながらもステージに近づいた。

「はい、持った」

姉はマラカスを次郎に渡した。

「楽器弾けないんだけど!？」

「いいの、いいの！ 適当に思った時に振っていいんだよ！」

次郎は戸惑いながら辺りを見渡した。恥ずかしいながらも、にこにこことこちらをみつめるレストランの人をみつけて、次郎は心のままにマラカスを鳴らした。

夜は長く続いた。

注文したご飯やデザートを食べてからも、二人の演奏はずっと続いた。

イルミネーションをみて歩くだけの静かなクリスマスじゃなく、こんなに騒がしいクリスマスは初めてだった。

二人は夜遅くにレストランを後にした。

「次郎、ほら」

姉は自分のマフラーを次郎の首に分けて巻いた。

「え……いいよ、別に」

「いいから、いいから。これ長いからさ、二人分いけるっしょ」

姉はくすくすと笑った。

いつの間にか、雪がちらちらと降ってきていた。

「お、ホワイトクリスマス？ いえ〜い！」

姉はテンションをあげて叫んだ。次郎はつられて笑った。

「次郎、帰ったら演奏の続きをするぞ！ 今日は徹夜だ！」

「えええ！？」

姉はお構いなしにずんずんと雪道を突き進んだ。次郎は慌てて姉の後を追った。

家に帰って次郎の部屋で、姉はギターを弾きまくり、クリスマスソングのCDをかけまくった。次郎はマラカスをがしゃがしゃと鳴らした。

いつの間にか夜が明けていた。

次郎は目を覚ました。

「う……………ん？」

光の差しこむ明るい日だった。

次郎は目を擦りながら起き上がった。姉の姿は無かった。

「あれ……………？ 姉さん？」

次郎は階段を下りて、リビングに向かった。

がたんと音がして、次郎は玄関に目を向けた。

「ただいま〜！ 次郎ちゃん、ちゃんとしてた？」

「母さん、父さん……………」

二人はにこにこことリビングに帰ってきた。

「はい、これ、お土産。ちゃんとご飯食べた？」

次郎は手渡されたキーホルダーをみやって、母をみやった。

「なあ、姉さん知らない？ 昨日来てただけ……………」

母と父は顔を見合わせて目を丸くした。

「さあ、分からないけど……………お姉ちゃん、いないの？」

「ああ……………」

「それなら、今日の電車で帰ったんじゃないか？」

次郎は不思議に思いながら、自分の部屋に戻った。

後日、やっぱり姉は風のように家に帰ってきて、風のように帰っていたことが分かった。

何がなんだか分からないが、帰りたい心境だったのかもしれない。
なににせよ、あの日のクリスマスは悪い気分じゃなかった。

あの時ばかりは、姉が僕にとってのサンタクロースだったのかも
しれない。

僕はちょっとだけ、クリスマスが好きになったのだった

(後書き)

クリスマスって一緒に過ごす人がいないと、ちょっとぴりさびしいか
なって気持ちになります。せっかく街中は綺麗なのになって思う。

なので、カップルとはまた違ったクリスマスを描いてみたくて書き
ました。

温かい気持ちになってくれたら嬉しいです。

読んでくださった方々に感謝をこめて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6407p/>

Unsilent Night

2010年12月24日18時10分発行